

《研究ノート》

チャールズ・コ克蘭の『この恵みの年！』

ーイギリス1920年代のレビューに関する覚え書きー

赤 井 朋 子

- I. はじめに
- II. 『この恵みの年！』について
- III. 作品の構成と内容
- 参考文献リスト

I. はじめに

1928年3月22日、ロンドン・パヴィリオン劇場において、『この恵みの年！』(*This Year of Grace!*)というレビューが上演された。このレビューを上演したのは、当時の代表的な興行主であったチャールズ・B・コ克蘭 (Charles B. Cochran, 1872-1951)、台本と作詞・作曲を担当したのはこの時期にコ克蘭と仕事をする事の多かった劇作家のノエル・カワード (Noël Coward, 1899-1973) であった。

カワードのレビュー・スケッチ集の編者であるバリー・デイ (Barry Day) によれば、『この恵みの年！』は、「カワードとコ克蘭のコラボレーションによる上演作品の中でも最もすぐれた作品であり、カワードの書いたレビューの中でもおそらく最もすぐれたレビューであると一般的に見なされていた」という (Coward, *Collected Revue Sketches* 57)。カワードがコ克蘭の依頼を受けて創作した作品には、今日においても評価の高いものが少なくない。1929年初

*2012年10月30日受理。

演のオペレッタ『甘辛人生』(*Bitter Sweet*)や、1930年初演の喜劇でその後もイギリスにおいて何度も再演されている『私生活』(*Private Lives*)、そしてボーア戦争以後の約30年間ににおけるあるイギリス人家族を描いた愛国的な大作『大英帝国行進曲』(*Cavalcade*, 1931)。カワード初期の代表作の多くがコ克蘭との共同作業により生み出されたと言っても過言ではないほどだ¹。『この恵みの年!』というレビューは、当時のそういった代表作の中でも特にすぐれた作品であると評価されていたのである。カワード自身、この作品のことを「私に関わったすべてのレビューの中でも最高の作品であった」と述べている(Coward, *Complete Lyrics* 88)。

『この恵みの年!』がロンドン・パヴィリオンで初演されたのは、1928年²。コ克蘭がこの建物の経営を引き継いだ1918年からちょうど10年後のことであった。1918年といえば、第一次世界大戦終戦の年である。戦時中に上演作品の質が低下したと言われる、ロンドン・ウエストエンドの演劇界を救うべく、コ克蘭が様々な改革に着手し始めたのもこの1918年であった。例えば、ロンドン・パヴィリオンは古くからミュージック・ホールとして使用されていた場所であったが、コ克蘭はその「けばけばしい装飾を施した」安っぽい建物を「より趣味のよい、落ち着いた」劇場へと大胆に改装し、彼が上演しようと考えていた舞台作品(主としてレビュー)にふさわしいものへと生まれ変わらせている³。

コ克蘭がこの劇場において追求したのは、彼自身、回想録に書き残しているように、洗練された質の高いレビュー、つまり、同じ娯楽でも、知的で芸術的なエンターテインメントとしてのレビューであった。その詳細については別の拙論においてすでに取り上げているので省略するが⁴、要するに、そのちょうど10年後に上演された『この恵みの年!』は、コ克蘭によるそのような実験的試みが実を結び、その成果となって現れた例であると言うことができるのである。

本稿では、コ克蘭のレビューの完成期とも言える時期に創作され上演された『この恵みの年！』を取り上げ、それに関する劇評や写真等の資料を参考に、このレビュー作品の「上演」がどのようなものであったのか、ナンバー毎に⁵、可能な範囲で具体的に解説を記していくことにする。そうすることにより、その後の時代のミュージカルなどに結びつく、この時代の音楽劇の特徴が断片的にでも見えてくるのではないかと思われる。

Ⅱ. 『この恵みの年！』について

『この恵みの年！』は、1928年2月28日から3月17日まで、マンチェスターのパレス劇場において試験興業^{トライアウト}が行われた後、3月22日よりロンドン・パヴィリオン劇場において本公演が行われ、そのロンドンにおいて計316回上演されている。マンチェスター公演の時には『チャールズ・B・コ克蘭の1928年のレビュー』（*Charles B. Cochran's 1928 Revue*）と呼ばれていたが、ロンドン本公演の際に、『この恵みの年！』というタイトルがつけられた。

レビューにとって作品のタイトルは重要なものであった。作品の内容に直接関係があるわけではないものの、何かしらのインパクトを与える気のきいたタイトルが求められていた。カワード自身、タイトルを決めるのに苦労したことを次のように回想している。

そのレビューのタイトルを見つけるために、私たちはみな、昼間は何時間も考え続けて疲れ果て、夜は夜で何時間も眠れないまま過ごすことになった。鉛筆と紙を手し、輪になって座りながら、頭をひねり、何でも思いつくものを口に出していった。どんなに的が外れていてもかまわなかった。間の抜けた提案でも誰か他の人にアイデアを思いつかせるかもしれないからだ。理想的なレビューのタイトルはすでに使い尽くされている

ように思えた。『^{ヴァニティ・フェア}虚栄の市⁶』、『^{ブリッカ・ブラック}がらくた⁷』、『^{オックス・アンド・エンズ}ロンドン・パリ・ニューヨーク⁸』、『^{オックス・アンド・エンズ}寄せ集め⁹』等々。ついにローン [ローン・ロレーヌ] が、「この恵みの年！」と言った。すぐに私たちは、それだと思った。『この恵みの年！』は、それまでに聞いたことのあるレビューのタイトルの中で、最も素晴らしいものの一つであったし、今でもそう思っている。(Coward, *Present Indicative* 263)

『この恵みの年！』の台本は、本稿の冒頭にも記したように、全面的にノエル・カワードが執筆している。そして、作詞と作曲もすべてカワードが担当している。ダンス・ナンバーについては、マックス・リヴァーズ (Max Rivers) が振付を行っているが、第1部のフィナーレにおけるポルカとワルツや、「ゴシック」と「アラベスク」のダンス・ナンバーはティリー・ロッシュ (Tilly Losch, 1907-1975) が振付を担当している¹⁰。

ロッシュはダンサーとしてこのレビューに出演もしているが、その他の主な出演者としては、ジェシー・マシューズ (Jessie Matthews, 1907-1981)¹¹とソニー・ヘイル (Sonnie Hale, 1902-1959)¹²、メイジー・ゲイ (Maisie Gay, 1883-1945)¹³が挙げられる。マシューズは、コ克蘭に抜擢されてこのレビューにトップ・スターとして主演をしているが、初演当時の劇評を読むと、例えば「相変わらず魅惑的でありながら^{アンスボイルド}擦れたところがない」というコメント¹⁴や「洗練という海の中に一滴だけ落とされた^{イノセンス}純真さ」(Farjeon 25) といった表現が目につく。マシューズの相手役になることの多かったヘイルについては、その多才さが指摘されている。例えば、「彼 [ヘイル] は、芸域の広さとスタイルを持つ多才な人である。彼が歌や踊りだけではなく演技も行えることは、このショーにとって大きな強みになっている」と評価されている。(Era)

その他の出演者としては、「コ克蘭氏の若い貴婦人たち」(Mr Cochran's Young Ladies) と呼ばれるコーラス・ガール達が重要である。当時の劇評を

読むと、「通常のコーラス・ガールにくらべるとおそらく可愛らしいとは言えないが、人というものはそもそも万能ではない。彼女達はその仕事においてきわめて有能であり、そのことが重要なのである」といったことが書かれている¹⁵。世紀転換期頃からイギリスで大流行していたミュージカル・コメディや大規模なスペクタクル・レビューとは異なり、コ克蘭のレビューにおいては、容姿だけで選ばれたコーラスはありえなかったのである。

コ克蘭のレビューは舞台美術（舞台装置や衣装、小道具）の点においても高く評価されることが多かった。『この恵みの年！』の場合は、ドリス・ジンカイセン（Doris Zinkeisen, 1898-1991）とオリヴァー・メッセル（Oliver Messel, 1904-1978）の2人がその分野を担当している¹⁶。

次の章において、『この恵みの年！』の具体的な内容をナンバー毎に見ていくが、その前に、このレビュー全体について書かれた文章を初演当時の劇評から2、3引用しておく。いずれも、レビューのスピード感や多彩さを指摘していると言える。

動きがきびきびしていて、実に多様性に富んでおり、活気があって愉快。実にウィットに富んだ楽しいショーであった。（中略）24のすべての場面が、短く鋭い。そして、ほとんどすべてにおいて、機知に富んだアイデアが、手際よく効果的に使われていた。（*Era*）

これほど多彩なショーを一度も退屈することなく最後まで通して見るのができたのはきわめて珍しい。（中略）このように変幻自在な舞台であれば、論理的に一貫した説明を書くことは難しいだろう。言葉数が多く冗漫になるだけであり、本来の目的からそれることになる。本来の目的とは、このレビューの魅力や美しさ、ウィットやユーモアを明確に感じ取ってもらえるように、レビューを見て実際に受けた感覚的な印象を、読者に伝え

ることであろう。(Play Pictorial)

2つ目の引用文で指摘されているように、レビューは、すぐれた作品ほど劇評を書くのが難しい表現形式であったのかも知れない。次の引用はアルファベットの A から W までの頭文字で始まる形容詞の最上級を並べることにより、『この恵みの年!』の多彩さに対する驚きと賞賛を表現していると言える劇評であるが、この中で劇評家は言葉遊びという手段を用いながら、レビューを評価することの難しさに挑戦しているようにも見える。

最上級の用法には気をつけないといけないから、以下のようにのみ言っておこう。『この恵みの年!』は、最も愉快で (amusing)、最も輝かしく (brilliant)、最も才気にあふれ (clever)、最も繊細で (dainty)、最も立派で (exquisite)、最も奇想をこらして (fanciful)、最も優雅で (graceful)、最も楽しく (happy)、最も皮肉が利いて (ironical)、最も陽気で (jolly)、最も多彩で (kaleidoscopic)、最も魅力的で (lovely)、最も壮麗で (magnificent)、最もきちんとして感じがよく (neat and nice)、最も贅沢で (opulent)、最も簡にして要を得て (pithy)、最も素早く (quick)、最も豊かで (rich)、最も素晴らしく (superb)、最も趣味がよく (tasteful)、最も実り豊かで (uberous)、最も多面的で (versatile)、最も機知に富み (witty)——何ということだ。^{エックス}「X」でつまずいた! (Ervine 15)

Ⅲ. 作品の構成と内容

『この恵みの年!』の初演時のプログラムに、この作品の配役がナンバー毎に記されている¹⁷。これを見ると、このレビューは全体が第1部と第2部に分

かれ、それぞれ12ずつのナンバーから成り立っていたことがわかる。間に休憩を入れて、合計24のナンバーが上演されたわけである。

本章では、各ナンバーのタイトルとその解説を記していくことにする。そうすることにより、当時の「上演」がいかなるものであったのかを探るきっかけとしたい。解説を書く際には、本稿の末尾に記した複数の文献と資料を参考にした。ナンバーによってはほとんど情報のないもの、逆に、テキストが部分的に出版されていたり、劇評等でよく取り上げられたりするものがあり、解説の長さに偏りがあることをあらかじめ断っておく。

第1部

1. 「地下鉄の駅」(“A Tube Station”) スケッチ、歌、ダンス

地下鉄駅構内を舞台にしたスケッチ。時々歌やダンスが入る。40人以上ものキャストを登場させた「ミニ・ミュージカル」(a mini-musical) とも呼べるナンバー。

[スケッチの内容]

地下鉄の駅構内。上手には売店、下手奥にはエレベーターの扉が見え、勤め人の格好をした人たちがエレベーターの到着を待っている。誰かの吹いた口笛がきっかけとなって、音楽が徐々に鳴り始め、勤め人たちが踊り始める。その音楽のタイトルは「一列に並んで待つ」(“Waiting in a Queue”)。イギリス人は誰でもおとなしく列に並び、何かを待っている、といった内容の歌詞である。

次いで、地下鉄の駅には場違いな貴族の女性2人、グウェンドリン(Gwendolyn)とミリセント(Millicent)が登場。どうやら、道路工事で車が使えないため、やむを得ず「平民と同じように」地下鉄を利用することに



図1 「地下鉄の駅」(Play Pictorial)

なっただけ。切符の買い方もわからないので、売店で崩した小銭を何枚も入れて、販売機を詰まらせる。結局、不必要にたくさんの切符が販売機から出てきて、売店の店員や駅員に呆れられる。

そして、メアリ（Mary）という若い女性が登場。彼女は、駅の構内で偶然、2人の友人と会うが、彼女達の短い会話から、メアリはロマンチストで理想を追い求めすぎるあまり、ボーイフレンドとすぐに喧嘩してしまうらしいことがわかる。（Coward, *Collected Revue Sketches* 58-65）

2. 「夢見るメアリ」（“Mary Make Believe”） 歌とダンス

このレビューのトップ・スターであるジェシ・マッシューズが、〈コ克蘭氏の若い貴婦人達〉と呼ばれるコーラスとともに歌とダンスを披露するナンバー。メアリとは1つ目のナンバーに登場するメアリのことで、理想を追い求めすぎるために恋を失う女性がテーマになっている。

ふんわりとしたロマンチックな衣装を身にまとったマッシューズは「可愛い雰囲気と優雅さを持ち、少し純情すぎるほど」であったが（*Punch*）、歌そのものはそのような女性を茶化した内容になっている（Coward, *Collected Revue Sketches* 66-67）。

メアリ役のマッシューズ自身の回想によると、「このナンバーの主題は、コーラス・ガールたちがリズムミカルな踊りによって私をそそのかし、私からバレエの動きを奪い去るというもの」であった（Matthews 91）。



図2 「夢見るメアリ」
（Coward, *Complete Lyrics*）

3. 「演劇案内」(“The Theatre Guide”) スケッチ

- (A) 「レッカー車」(“The Wrecker”)
- (B) 「母子の絆」(“The Silver Cord”)
- (C) 「若きウッドリー」(“Young Woodley”)
- (D) 「ノエル・カワードの劇」(“Any Noël Coward Play”)

司会者(ランス・リスター(Lance Lister))による前口上の後に、4つのきわめて短いスケッチが続く。4つのスケッチは、ロンドンで上演中の4つの演劇作品について、各々、全体的なテーマや印象をほんの2、3行程度の滑稽で短い寸劇にまとめたものである。「チケットの予約に走る前に、これから鑑賞しようとしている劇についていくらかでも知ることができるように、」一種の予告編を設けることにしたのだという¹⁸。

- (A) は、アーノルド・リドリー(Arnold Ridley)とバーナード・メリヴェイル(Bernard Merivale)作の鉄道ミステリー劇。
- (B) は、1925年にピューリッツァー賞を受賞しているアメリカ人作家シドニー・ハワード(Sidney Howard)による三幕劇。『母子の絆』は1926～27年にブロードウェイで最も成功を収めた劇の1つであった。
- (C) は、ジョン・ヴァン・ドゥルーステン作の三幕劇。1925年の事前検閲では上演許可が降りなかったが、1928年2月に再度検閲を受けて上演を許可された曰く付きの作品。
- (D) の「ノエル・カワードの劇」においては、「彼[カワード]は容赦なく自分自身の足を引っ張っていた。最後の『ノエル・カワードの劇』のスケッチで観客に示されたのは、野次を飛ばす客席の光景であった」(Era)。そして、「主演女優がフットライトのある所まで下がってきて、ブーイングの嵐の中、『紳士淑女の皆様、今夜が私の人生において最も幸福な夜となりました』と挨拶していた」(Farjeon 25)。ちょうど『この恵みの年!』

初演の前年、つまり1927年の11月に、カワードの『シロッコ』(Sirocco)がロンドンで上演された時、観客席から激しいブーイングが起こったとカワード自身が回想しているが(Coward, *Present Indicative* 249-250)、このスケッチはその時の観客席の様子を自嘲的に再現したものと思われる。

4. 「あなたに夢中」(“Mad about You”) 歌とダンス

彼(He)：ウィリアム・カヴァナ (William Cavanagh)

彼女(She)：シーラ・グレアム (Sheila Graham)

コーラス：コ克蘭氏の若い貴婦人達

ダンス：ジーン・バリー (Jean Barry)、

ジャック・ホランド (Jack Holland)



図3 「あなたに夢中」のコーラス
(Coward, *Complete Lyrics*)

〈彼〉と〈彼女〉、そしてコーラスによるナンバー。〈彼〉は「あなたに夢中」と歌うが、〈彼女〉は「あなたが遊び人だとわかっている」と歌う(Coward, *Complete Lyrics* 92)。

「旋律の豊かな短い歌と、エピローグとしての見事なダンス。ダンスは金髪の美しいアメリカ人、ジーン・バリーと、ダンスに秀でた彼女のパートナー、ジャック・ホランドによる。」(*Punch*)

5. 「バス・ラッシュ」(“The Bus Rush”) スケッチ

バス停の列に並ぶ中年女性(メイジー・ゲイ)のコミカルなスケッチ。

「メイジー・ゲイ嬢は、バスを待つ中年の買物客を調子よく演じていたが、全体としてこの題材は彼女にふさわしいものではない。私達も、好色の雑役婦

のような演技にはそろそろ辟易し始めている。¹⁹⁾」

6. 「ローレライ」 (“Lorelei”) 歌

歌手 (Singers) : エイドリエンヌ・ブルーン (Adrienne Brune)、ソニー・ヘイル

ローレライ (Lorelei) : ラウリ・ディヴァイン (Lauri Devine)

船乗り (Sailor) : ウィリアム・カヴァナ

ローレライは、ドイツのライン川岸に出没し美しい歌声で船人を誘惑して難破させるという言い伝えのある水の精 (セイレーン) のこと。

スピードとパワーの時代である現代は、もはや船乗り達がセイレーンの歌声にうっとりさせられるような暢気でロマンチックな時代ではない。蒸気船の吐き出す黒い煙にセイレーンがむせぶだけである。(Coward, *Complete Lyrics* 92)

「オリヴァー・メッセルがデザインした岩の上で、月を背景に、ラウリ・ディヴァイン嬢は、船乗りを誘惑しようとして、信じられないほど見事なバランス感覚を示しながら、彼女の美しい身体を振っていた。」(*Punch*)

7. 「雪玉」 (“Snowball”)

「バンジョーを弾くのが巧い小柄の演者。年齢は不詳で、14歳〜30歳ぐらいであろうか？」(*Punch*)

「小柄の黒人コメディアンによる『雪玉』も称賛に値する。」(*Era*)

8. 「知らぬが仏」 (“Ignorance Is Bliss”) スケッチ

(A) 1890年

(B) 1928年

[スケッチの内容]

(A) 1890年

ホテルの寝室。宿の女主人（メイジー・ゲイ）に案内されて、若い夫婦が部屋に通される。2人はハネムーン旅行中らしい。女主人も興味津々といった風であるが、2人は恥ずかしそうにしている。女主人が部屋から出ると、2人はどちらが先に鞆の中身を出すか、コイン投げをして決める。妻（ジェシ・マシューズ）の順番が先に決まると、夫（ソニー・ヘイル）の方は、フロントに明日の朝食について指示してくると言って、部屋を出る。妻が「ああ、お母さん」と嘆くところで、暗転。

(B) 1928年

非常に現代的なホテルの寝室。若い夫婦が部屋に案内される。少しも緊張した様子はなく、妻（ジョーン・クラークソン (Joan Clarkson)）は早速、携帯用のグラモフォンでダンス音楽のレコードをかけ、服を脱ぎ始める。背中の中のホックをはずしてほしいと夫（ランス・リスター）に頼むが、夫はホックで指をひっかく。夫の「いつも、このいまいましいフックで指をひっかいてしまう！」の台詞で、暗転。(Coward, *Collected Revue Sketches* 68-72)

9. 「アラベスクー手のダンス」 (“Arabesque, Dance of the Hands”) ダンス
オーストリアのダンサーであるティリー・ロッシュのダンス。

「ロッシュ嬢は、非常に魅力的な個性の持ち主であるが、足を使ったダンスだけではなく、手を使ったダンスも踊る。(中略)『この恵みの年!』の中でも、コ克蘭氏の見いだした最もすぐれた才能である。」(Era)

「ティリー・ロッシュ嬢の『手のダンス』においては、見事に研究された両腕、

両手、指の動きが素晴らしい効果を生み出していた。」(*Punch*)

10. 「眺めのいい部屋」(“A Room with a View”) 歌

〈彼〉(ソニー・ヘイル)と〈彼女〉(ジェシ・マッシュューズ)のデュエット。8番目のナンバーの「知らぬが仏」の(A)に、部屋の窓からの眺めに言及する台詞がある(Coward, *Collected Revue Sketches* 69)。

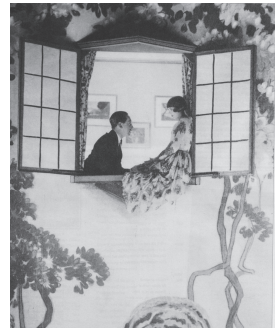


図4 「眺めのいい部屋」
(Coward, *Complete Lyrics*)

11. 「歳の差なんて」(“It Doesn't Matter How Old You Are”) 歌

メイジー・ゲイがソロで歌う。

「赤ら顔のグロテスクな雑役婦に扮したメイジー・ゲイ嬢は、酔っばらって、下品で感傷的な思い出に耽る。残酷なほど醜い所作。下唇を震わせるところなど、技術の巧さが感じられる。」(*Punch*)

「傷つきやすい観客だったら、老齡と醜さの結びつきの中に悲哀を見いだすことだろう。カワード氏が下層階級の生活を覗き込む時には、ダン・レノやリトル・ティッチ²⁰のおどけた演技に血を^{ベースス}通わせていた共感や熱意といったものが不足しているようだ。²¹」

12. 「お婆さんのダンスを教えて」(“Teach Me To Dance Like Grandma”) 歌、ダンス

ジェシ・マッシュューズとコーラスが歌う。ジャズの単調な調べにはもう飽きて

しまった。もっとシンプルでゆっくりした音楽がよいので、祖母が踊っていたような踊りを教えてください、と。(Coward, *Complete Lyrics* 93)

そして、古きよき時代のダンスが始まる。

ポルカ：ティリー・ロッシュ

マズルカ：ティリー・ロッシュ、ソニー・ヘイル

ポルカを踊る子供達 (Polka Children) 8名

若い貴婦人達 (Young Ladies) 8名

若い紳士達 (Young Gentlemen) 8名

美の三女神 (The Three Graces)

タリオーニ (Taglioni)²²：ジェシ・マシューズ

グリジ (Grisi)²³：シーラ・グレアム

エルスラー (Ellsler)²⁴：モイア・ニュージェント

ワルツ：ジーン・バリー、ジャック・ホランド



図5 「お婆さんのダンスを教えてください」(Sketch)

「ハイウエストやロング丈のスカートををはいた昔懐かしい女性達の姿。ワルトトイフェルやシュトラウスのゆったりしたワルツ。」(*Play Pictorial*)

「優雅であり、アクロバティックでもあるジーン・バリー嬢とジャック・ホランド氏のペア。」(*Era*)

「『風変わりな店』のロポコワ以来²⁵、ティリー・ロッシュ嬢のポルカとマズルカほど人を楽しい気分にする作品はなかった。あまりに短いわずか3分の

間に、彼女は自分が最高の芸術家という希少な立場にあることを正しく証明した。そして、当然、彼女の素晴らしい才能が他の出演者の演技をいくらか曇らせてはいたが、お婆さんの時代のダンスの場面は、ドリス・ジンカイセン嬢のうっとりするような衣装も加わり、全体として実に見事に仕上がっていた。」
(*Punch*)

「フィナーレ」

全員

〈幕間〉

第2部

13. 「リドの海岸」 (“The Lido Beach”) スケッチ

[スケッチの内容]

リドの海水浴場。オープニング・コーラス (ジェシ・マシューズ他3人。) 全体に、陽光を浴びて明るい雰囲気。色彩も鮮やか。

イギリス人の妻達の歌、続いて夫達の歌。

オーストリア人の年配の男爵夫人 (男優のダグラス・ビング (Douglas Byng) が演じている) が海岸に出てきて、サンオイルを体に塗る。背中の方と一緒にいる男性に塗ってもらう。(イギリス人の妻達はその大胆さに驚く。)

イギリス人の若い女性達のコーラス (ジェシ・マシューズ他3人によるカルテット)。(Coward, *Collected Revue Sketches* 73-82)

14. 「イギリス版リドの海岸」 (“The English Lido Beach”) スケッチ

「リドの海岸」の姉妹編 (companion piece) である。

[スケッチの内容]

司会者（ランス・リスター）による短いア
ナウンス。イギリスのリゾート地もなかなか
いいですよ、気楽で、といったことを言う。

オープニング・コーラス（イギリス人の夫
婦2組）：私たちは別に東洋や大陸のものに
は飛びつかず、イギリスのもので満足してい
るといった内容の歌。

舞台装置は基本的には「リドの海岸」と同じ。テントの代わりに、移動式更
衣車が置いてあるだけである。ただ、背景の空は灰色で、風も強く、人々（庶
民的）の身につけるものは、南欧のリゾート地とは大違いである。

子供連れの家族が何組か来ている。子供が、虫におびえたり、兄弟喧嘩をし
たりで、大人はゆっくりくつろぐこともできない。小さな男の子が上半身に水
着をつけていないと、巡回中の警察官に注意されるという一コマも。

コーラス：「母親の愚痴」（“Mother's Complaint”）

突然、子供達が「大きな鯨がいる」と言って騒ぎ出す。しかし、それは鯨で
はなく、毎週英仏海峡を泳いで渡るデイジー・キップショーという女性である
ことが判明。水着姿の大柄なデイジー（メイジー・ゲイ）が舞台に登場すると、
カメラで記念撮影をする人も。

フィナーレ：デイジーを讃える歌。イギリスの愛国歌「ルール・ブリタニア」
の歌詞でもある“Britannia rules the waves”という言葉が繰り返される。
（Coward, *Collected Revue Sketches* 83-95）



図6 「イギリス版リドの海岸」
（Play Pictorial）

「彼 [カワード] は、イギリスの海岸リゾートを鋭利な快活さでもって攻撃
している（中略）。が、何とか面白可笑しく仕上げている。このエピソードは、
このショーの中でも最も観客を爆笑させた愉快的なナンバーであった。

（中略）イギリス海峡を泳ぐ人物を演じたメイジー・ゲイ嬢と、取るに足りない人物を完璧に演じていたアン・コドリントン嬢に、観客は大声でいつまでも抱腹絶倒していた。²⁶」

「下層中産階級の人々の、休暇についての一般的な考え方を諷刺するにあたって、やや残酷とも言えるスケッチである。カワード氏自身、少しも優位に立つわけでもないのだが。しかしながら、このスケッチは、きびきびと陽気な調子で終わっている。イギリス海峡を泳ぐ水泳選手に扮したメイジー・ゲイ嬢が登場し、行進曲を歌いながらイギリス人の母親達と子供達を引き連れて歩くのである。爆笑を誘うほど可笑しい場面であった。」(Era)

15. 「バレエ——谷間の百合伝説」(“Ballet: The Legend of the Lily of the Valley”) 歌、ダンス

司会者（ソニー・ヘイル）による前口上と、そのあとに続く短いバレエ。

司会者は、このバレエがディアギレフのロシア・バレエに啓発されたものであると言う。そして、芸術の革新の時代において最も重要なのは原初への回帰であるといったことも述べて、このバレエのストーリーを説明する。



図7 「バレエ 谷間の百合伝説」
(Play Pictorial)

舞台は18世紀初頭のフランス。田舎娘のフラヌレット（ティリー・ロッシュュ）と彼女に心を寄せる羊飼いのベルガモット（ラウリ・ディヴァイン）によるパ・ドウ・ドウが踊られる。次いで、6人の妖精の踊り。そこへこの牧歌的な雰囲気と不釣り合いなプーピナック侯爵（ダグラス・ビング）と宮廷の女性達が現れる。そのことは調和のとれていない不快な音楽によっても表現される。侯爵はフラヌレットを見るなりその美しさに魅かれ、彼女を口説き始める。その間、宮廷の女性達によるバヴァース。そこへベルガモットが血相を変えて現

れ、侯爵と争う。(Coward, *Collected Revue Sketches* 96-99)

「ディアギレフの最近の実験作である幾何学的なバレエを、圧倒的な面白さで戯画化したもの。²⁷⁾」

「見たところ『谷間の百合伝説』という牧歌的なタイトルが付いているが、ソニー・ヘイル演じるインテリぶった面白いアナウンサーによって提供された展望は、まもなく、キュービズム的なセットやロッシュ嬢とディヴァイン嬢の野暮ったい衣装と動きによって裏切られる。」(*Stage*)

16. 「3の法則」(“Rules of Three”) スケッチ

司会者(ジョーン・クラクソン)による前口上。そのあとに3つの演劇作品の短いパロディが続く。3つに共通するテーマは、三角関係(the Eternal Triangle)。どのスケッチも妻が愛人と一緒にいるところへ夫が現れる場面になっている。

(A) バリー (Barrie)

バリーとは、『ピーター・パン』(Peter Pan)の作者のジェームズ・バリー(James Barrie, 1860-1937)のことである。このスケッチは、ピーター・パンがウェンディの部屋に現れる場面を下敷きにしている。

(B) ロンズデイル (Lonsdale)

ロンズデイルとは、イギリスの風習喜劇作家フレデリック・ロンズデイル(Frederick Lonsdale, 1881-1954)のことである。このスケッチに登場する夫(ランス・リスター)は、慇懃で、妻(ジェシー・マシューズ)にとって、ものわりのよい夫である。

(C) フランスの笑劇 (French Farce)

夫が予定より3日も早く帰宅。愛人は慌てて隠れる。が、実は夫もメイドとできていたという、ジョルジュ・フェードー風のスケッチ。(Coward, *Collected Revue Sketches* 100-110)

17. 「ダンス・リトル・レイディ」(“Dance, Little Lady”) 歌とダンス

このレビューの「山場」のひとつ。「ジャズ・エイジやフィツジェラルドの全作品における狂乱、退屈、落ち着きのなさを10分で要約している。」(Citron 98)

ラウリ・ディヴァインと12人のダンサー

仮面と衣装のデザイン：オリヴァー・メッセル



図8 「ダンス・リトル・レイディ」
(Coward, *Complete Lyrics*)

「美しいが死人のように青白い、疲れきった若い女性が、シンコペーションの愛好者の勧誘に徐々に反応していく。笑い顔の仮面を被った幽霊のような人物たちが、彼女の周囲をフォックストロットのステップで回る。ついには、彼女の顔にもよく似た仮面が取り付けられ、彼女自身もその葬列に加わる。²⁸」

「この場面では、巧みなダンサーであるラウリ・ディヴァイン嬢が、モダン・ガールを模倣している。モダン・ガールは、生気のない、消耗しきった、にこりもしない様子でダンスを踊るが、食料の配給を受け空襲に怯えながら神経質に育った若い世代にはよく見られる傾向である。オリヴァー・メッセル氏がこの場面のために仮面をデザインしている。この仮面は、夜に洒落たレストランやクラブへ行くといつでも目にするような、陰気で空虚な表情を忠実に再現している。そういう場所では、虚ろな表情をした若い男女が、小刻みの足さばきで虚ろなダンスを踊っているが、ちょうどそういった時の表情だ。この場面は、真実を伝えている点において残酷であるが、今のこの時代を純粹に諷刺したものであるがゆえに、カワード氏の才能が開花しつつあるのを確信する。」(Ervine 15)

18. 「蝙蝠座」(“Chauve Souris”) 歌

偉大な人：ランス・リスター

歌手：メイジー・ゲイ、フレッド・グローヴズ、ソニー・ヘイル、ダグラス・ビング、ロバート・アルガー

衣装デザイン：ドリス・ジンカイセン。

5人の歌手による^{クインテット}五重奏。ただし、歌詞はロシア語に似せただけのでたらしめな言葉である。(Coward, *Complete Lyrics* 96)

「ランス・リスター氏が愉快的ほら吹きパリエフ²⁹の物真似をする。カワード氏による楽しいナンセンスと音楽は本当に面白い。」(*Punch*)

19. 「ゴシック」(“Gothic”)

舞台美術と衣装デザインはドリス・ジンカイセン。

「制御された美しいポーズのふたり、ティリー・ロッシュ嬢とラウリ・ディヴァイン嬢。まるで、ステンドグラスのふたりの聖者が、冷たい窓から歩いて降りてきたかのような。」(*Punch*)

「この上なくうっとりさせられた瞬間は、『ゴシック』という場面において、ティリー・ロッシュ嬢とラウリ・ディヴァイン嬢が、バッハの音楽に合わせてポーズを取ったときであった。³⁰」



図9 「ゴシック」
(*Play Pictorial*)

20. 「愛することを学ぼう」(“Try to Learn to Love”) 歌とダンス

ソニー・ヘイルによる〈彼〉とジェシー・マッシュューズによる〈彼女〉、そして、

コーラス（コ克蘭氏の若い貴婦人達）からなるナンバー。

21.「法と秩序」(“Law and Order”) スケッチ

[スケッチの内容]

公演の前の通り。勤務中の二人の婦人警官（ダグラス・ビングとメイジー・ゲイ）。何かが破裂するような音が遠くから聞こえるが、単なるバルーン・タイヤの破裂音だろうと言って、二人はおしゃべりを始める。あまりにもおしゃべりに夢中になっているため、「人殺し！」と



図10 「法と秩序」
(Mander and Mitchenson)

いう叫び声にも気づかない。ナイフを手にした男と、二人の女と、リヴォルヴァーを手にした男が舞台を横切るが、それにさえ気づかない。再び叫び声と、銃声。ところが最後の台詞は、「またバルーン・タイヤが破裂したんだね。」
(Coward, *Collected Revue Sketches* 111-115)

「堂々とした威厳のあるナンバーに囲まれると、メイジー・ゲイ嬢の出演する場面は案外つまらないものになる。中には、鎖の中の外れやすい環でしかないような題材（例えば婦人警官の対話など）もあった。」(Tatler)

22.「スペイン幻想曲」(“A Spanish Fantasy”) 歌

ジーン・バリーとジャック・ホランドによるスペインのダンス。

23.「キャスルトンとマック」(“Castleton and Mack”)

アメリカのコメディアンによる特別番組 (specialty)。

「キャスルトンとマックによるステップ・ダンスとグロテスクな体操。」
(*Punch*)

「キャスルトンとマックは、信じられないほどの技巧を駆使しながら、比較にならないほどの醜いダンスを踊っていた。最後は大変器用に踊られるアクロバティックな^{マスカレード}仮装舞踏会で終わっていた。³¹」

24. 「フィナーレ」 (“Finale”)

全員が舞台上に登場する。

順番に各自が自分たちの歌を歌いながら、観客に挨拶をする。

2 人の裏方

8 人のコーラス・ガール

ショー・ガールたち

端役の演者たち

主役の演者たち

一度暗転した後、自動車に乗った全員が舞台上に現れるフィナーレ。

(Coward, *Complete Lyrics* 97-98)



図11 「フィナーレ」
(Coward, *Complete Lyrics*)

「最後はグランド・ラリー。全員が自動車に乗って帰宅する。」(*Play Pictorial*)

註

- 1 コ克蘭によって上演されたカワードの作品（初演）には、『ダンスを続けて』（*On with the Dance*, 1925）、『この恵みの年！』（*This Year of Grace*, 1928）、『甘辛人生』（*Bitter Sweet*, 1929）、『私生活』（*Private Lives*, 1930）、『大英帝国行進曲』（*Cavalcade*, 1931）、『言葉と音楽』（*Words and Music*, 1932）、『風俗画』（*Conversation Piece*, 1934）がある。このうち、『甘辛人生』と『私生活』、『大英帝国行進曲』は映画化もされている。

- 2 実際にはロンドン公演の前に、『この恵みの年！』の試演がマンチェスターにおいて行われている。
- 3 *As You Were*, London Pavilion, 1918の上演ファイル(The V & A Theatre and Performance Archives)におさめられた劇評, “*As You Were* at the London Pavilion,” *World*, 7 Aug. 1918 (頁不明) より。
- 4 赤井朋子「両大戦間期イギリスのレビューと興行師 C・B・コ克蘭」『近現代演劇研究』第1号、2008年、4-14頁。
- 5 レビューの場合、各場面のことを「ナンバー」と呼ぶ。
- 6 『虚栄の市』(*Vanity Fair*) は1916年にパレス劇場 (Palace Theatre) で上演されたアーサー・ウィンペリス (Arthur Wimperis) のレビュー。
- 7 『がらくた』(*Bric-a-Brac*) は1915年にパレス劇場で上演されたアルフレッド・バット (Alfred Butt) のレビュー。
- 8 『ロンドン、パリ、ニューヨーク』(*London, Paris and New York*) は1921年にロンドン・パヴィリオンで上演されたコ克蘭のレビュー。
- 9 『寄せ集め』(*Odds and Ends*) は1914年にアンバサダーズ劇場において上演されたコ克蘭のレビュー。
- 10 ティリー・ロッシュはオーストリア生まれのダンサー、振付家。ウィーンのオペラ座付属バレエ学校でバレエを学び、オペラ座のブルミエール・ダンスーズになっている。オーストリア以外の国々でも活躍しており、マックス・ラインハルトがニューヨークで上演した『夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*, 1927) や、やはりニューヨークのニュー・アムステルダム劇場で上演されたフレッド・アステア主演のレビュー『バンド・ワゴン』(*Band Wagon*, 1931) などに出演している。
- 11 ジェシー・マシューズはロンドンのソーホーにある貧しい家庭に生まれるが、街のダンス教師からダンサーとしての素質を見いだされ、子供のダンサーとしてミュージック・ホールに出演するようになる。その後アンドレ・シャルロやコ克蘭のレビューに主演することにより国際的なスターとなり、特に20年代30年代には舞台だけではなく映画においても活躍する。
- 12 ソニー・ヘイルは、ロンドン生まれの俳優で、父親も姉も俳優という家系。初舞台は、1921年にロンドン・パヴィリオンで上演された *Fun of the Fayre* というレビュー。主としてレビューやミュージカル・コメディに主演をするが、1930年代には映画に多く出演するようになる。
- 13 メイジー・ゲイはロンドン生まれの俳優で、初舞台は1903年、コーラス・ガールとしてであるが、次第にコメディエンヌとしての才能を発揮し、アンドレ・シャルロやチャールズ・コ克蘭のレビューに多く出演するようになる。

- 14 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイル (The V & A Theatre and Performance Archives)におさめられた劇評“The Admirable Cochran” (掲載誌不明)より。
- 15 同上。
- 16 ドリス・ジンカイセンはスコットランド生まれの舞台美術家。オリヴァー・メッセルはロンドン生まれのイギリス人舞台美術家。
- 17 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイルにおさめられたプログラム (*The Magazine Programme*, 22 Mar. 1928)。
- 18 The Lord Chamberlain's Plays: 1928/4 *This Year of Grace*, British Library, London.
- 19 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイルにおさめられた劇評 “Brilliant Noël Coward Revue” (掲載誌不明)。
- 20 [訳注] ダン・レノ (Dan Leno) もリトル・ティッチ (Little Tich) もミュージック・ホールのコメディアンであった。
- 21 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイルにおさめられた1928年3月22日の劇評 (掲載誌不明)。
- 22 マリー・タリオニ (Marie Taglioni, 1804-84) ロマンチック・バレエ時代を代表するイタリアのバレリーナ。『ラ・シルフィード』 (*La Sylphide*) などを振り付けたフィリッポ・タリオニ (Filippo Taglioni) の娘。
- 23 カルロッタ・グリジ (Carlotta Grisi, 1819-99) イタリアのバレエ・ダンサー。1841年初演の『ジゼル』 (*Giselle*) に主演した。
- 24 ファニー・エルスラー (Fanny Elssler, 1810-84) オーストリアのバレエ・ダンサー。タリオニのライバル的な存在だった。
- 25 [訳注] 「風変わりな店」 (“La Boutique Fantasque”) は、1919年にバレエ・リュスがロンドンのアルハンブラで上演した一幕もののバレエ。レオニード・マシーンの振付、リディア・ロポコワ主演。
- 26 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイルにおさめられた劇評 “Brilliant Noël Coward Revue” (掲載誌不明)。
- 27 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイルにおさめられた劇評 (掲載誌不明)。
- 28 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイルにおさめられた劇評 “The Admirable Cochran” (掲載誌不明)。
- 29 [訳注] ニキータ・バリエフ (Nikita Balieff, 1877-1936) モスクワのキャバレー「蝙蝠座」 (1908-38) の主催者。
- 30 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイルにおさめられた劇評 “Brilliant Noël Coward Revue” (掲載誌不明)。
- 31 *This Year of Grace!* London Pavilion, 1928の上演ファイルにおさめられた劇評 (掲載誌不明)。

参考文献

- Citron, Stephen. *Noël & Cole: The Sophisticates*. 1992. Milwaukee: Hal Leonard, 2005.
- Cochran, Charles B. *Cock-A-Doodle-Do*. London: J. M. Dent & Sons, 1941.
- Coward, Noël. *Collected Revue Sketches and Parodies*. Ed. Barry Day. London: Methuen, 1999.
- . *Collected Sketches and Lyrics*. London: Hutchinson, [1931].
- . *The Complete Lyrics*. Ed. Barry Day. London: Methuen, 1998.
- . *Present Indicative*. 1937. London: Methuen, 2004.
- Ervine, St John. Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Observer* 25 Mar. 1928: 15.
- Farjeon, Herbert. Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Graphic* 7 Apr. 1928: 25.
- Mander, Raymond, and Joe Mitchenson., comp. *Theatrical Companion to Coward*. 1957. London: Oberon, 2000.
- Matthews, Jessie. *Over My Shoulder: An Autobiography*. London: W. H. Allen, 1974.
- Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Era* 28 Mar. 1928: 1.
- Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Manchester Guardian* 23 Mar. 1928: 20.
- Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Play Pictorial* Apr. 1928: 42-59.
- Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Punch, or the London Charivari* 4 Apr. 1928: 386-387.
- Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Sketch* 28 Mar. 1928: 607-609.
- Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Stage* 29 Mar. 1928: 16.
- Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Tatler* 11 Apr. 1928: 68-69.
- Rev. of *This Year of Grace!* by Noël Coward. London Pavilion, London. *Times* 23 Mar. 1928: 12.

その他の参考資料

Coward, Noël. *A Room with a View*. Naxos, 2001.

The Lord Chamberlain's Plays (LCP): 1928/4 *This Year of Grace*, British Library, London.

The Lord Chamberlain's Plays Correspondence Files (LCP CORR): 1928/8108 *This Year of Grace*, British Library, London

As You Were, London Pavilion, 1918. Victoria & Albert Museum. London

This Year of Grace! London Pavilion, 1928. Victoria & Albert Museum. London.

付記

本稿は、日本学術振興会2012年度科学研究費補助金〈基盤研究（C）〉「20世紀初頭～戦間期ロンドンにおける寄席と劇場の関係」による研究成果の一部である。